INTERVIEW

東近江市永源寺診療所 所長
花戸貴司先生

チーム永源寺で「地域」を支える

聞き手：山田隆司　地域医療研究所長

自分が変わろう

山田隆司（聞き手）　今日は滋賀県の永源寺診療所に花戸貴司先生を訪問しました．

まずは先生のこれまでの経歴を簡単に紹介していただけますか．

花戸貴司　私は自治医科大学を平成７年に卒業しました．滋賀医科大学病院で２年間研修した後，へき地中核病院である湖北総合病院に赴任，６年目でいわゆるへき地診療所勤務を命じられ，ここに赴任しました．湖北総合病院では小児科を中心に研修し，小児科の専門医も取り意気揚々とやって来たのですが，赴任した４月に子どもを診察したのは自分の息子と娘とその友だちの３人だけ（笑）．こりゃ待っているだけでは駄目だと思い，できるだけ地域に出て，診療所に来ない人たちの顔を見に行こう，いろいろなところで地域の人たちと関わろうと思ったのが，ここに来て最初に感じたことです．

その時の私は大きな病院の経験を基に，この田舎の地域にも最高の医療を届けようと立派な医者らしいことを考えていたのですが，早々に見事に打ち砕かれました．

ここに赴任して最初に在宅で看取った患者さんは，脊髄小脳変性症を10年以上患っておられた60代の男性の方でした．介護保険が始まる前から家族が在宅で介護をされていましたが，少し前から体調が悪くなり，私が赴任してしばらくするとご飯が食べられなくなってきた．私も若かったので，あれやこれやと検査をしては

点滴や薬を処方しました．そんなある日，患者さんに点滴をしようと思った時，後ろからその方の奥さんが「先生，もうあかんな」と言われたのです.「もうあかん」と言われ，これ以上よくならない，自分のやっていることを否定されていると感じました．病院でそのような言葉をかけられたこともなかったので，眉間にしわを寄せて後ろを振り返ると，奥さんだけではなく，家族や親戚，近所の人がベッドを取り囲むように並んで患者さんを見ておられた．それを見たときに，自分の心の中にあった怒りがスーッと引いて，自分はこの場に相応しくないと感じたのです．

その患者さんは，長年地域の人たちと共に農作業をされていましたが，病気になり，次第に病院にも通えなくなり，在宅で介護しているうちに，だんだん弱って食べられなくなってきた．そして，いよいよ人生の幕を下ろそうとしている．そんなところに私がやってきて，たくさんの治療を始めた．家族や周囲の人はみんなその方の人生を理解し，もう寿命なのかもしれないとその人を見ておられたのに，私は病気しかみていなかった．もう，最初にガツンと頭を殴られたようで「自分自身が変わらなくてはならない」と思いました．

その後からは，患者さんや地域の方と，いろいろお話をするようになりました．

山田　先生は３年間，小児科の研修をして専門医も取られたわけで，永源寺診療所の勤務を終えた後にまた小児科医として活躍したいとは思われなかったのですか．

花戸　最初はそう考えていました．２，３年ここにいれば義務は果たせるので，ここの診療をしながら，研究生として大学に通い基礎研究をしていました．その研究で学位ももらいましたので，義務が終われば大学に戻って小児科としてキャリアを取り戻そうと考えていました．でも地域の人たちと話をしているうちに，病気を診る，薬を処方するよりも，違ったアプローチの仕方があるということが楽しくなり，だんだん地域に引きずり込まれていった．地域に出て，地域の人たちと一緒に活動をすると，目の前の患者さんが一人の地域の人としていきいきと生活をしておられることを楽しいと思うようになりました．

山田　その手応えというか，その豊かさというか，温かさみたいなところに喜びを感じるようになった．

花戸　そうなんです．最初は田舎の診療所に来て，子どもも少なく，高齢化率も高くてというネガティブなイメージをもって仕事をしていたのですが，よくよく考えると，私が赴任した当時の永源寺地域は，人口が6,500人，高齢化率も24パーセントと今の全国平均と同じくらいでした（今は人口5,300人，高齢化率は35パーセントくらいです）．当時から将来は日本の高齢化率は進み，少子化はさらに顕著になると言われていた．当時の永源寺地域は，まさに今後の日本が迎えようとしている姿，日本の先進地域なんだと考えを変えるようになったら，ここでの仕事が，もしかしたら日本のモデルになれるのではないかと思うようになったのです．